

読み聞かせ場面における母子の やりとりの会話分析

福 嶋 秩 子

1. はじめに

会話分析の分野において関心の的となっているものに、会話のやりとりがどのような構造をもっており、それに参加するためにどのような方策がとられているかということがある。たとえば、英語の会話のやりとりについて現在認められていることは、まず、複数の人間が交互に話すこと(turn-taking)、話す権利をめぐる様々な方策が用いられることである。また、会話がいくつもの対をなすやりとり(adjacency pairs)からなっているということもいわれている。要請と受諾、質問と答えなどがその例である。

本稿の目的は、2歳児とその母の会話をとりあげ、その会話の構造を記述することである。会話のやりとりはこどもの成長に伴い変化するであろうし、場面によっても異なると考えられるが、ここではまず、日常的な母子の交渉場面のひとつである読み聞かせの場面に限定し、研究の出発点としたい。

2. 調査資料について

データとして米国滞在中の二組の日本人母子の会話の文字化資料を用いる。調査の時期は1984年で、筆者が録音、文字化したものである。

データ1は当時2歳4ヶ月の女の子とその母親の会話である。時に英語の名詞が使われることはあるが、二人ともおおむね日本語を話している。渡米後2年近くたった。筆者も録音の場に同席しており、会話に加わることもあったが、その部分はここで分析の対象にしない。

データ2は当時2歳7ヶ月の女の子とその母親(筆者)である。渡米後1年が過ぎた頃で、こどもは保育園に通っていた。母親が日本語を話していても、こどもは英語と日本語の両方を用い、二言語が混ざったことばもあらわれてい

る。(例 「THIS NO MORE まっくら。」「BIG の CARROT.」) 2歳2ヶ月から帰国後の3歳7ヶ月までの言語資料もあるが、ここでは扱わない。

どちらのデータも、原録音のうちで母親がこどもに本を読んでやっているときに限定した。発言の数、つまり話し手の交替によってくぎられた発話連続の数でいえば、データ1は128、データ2は101である。こどもの発話についての平均形態素数(延べ発話)は、データ1は1.58、データ2は1.68である。どちらの資料にもすでに最高4形態素からなる発話があらわれている。

3. 対になるやりとりと修正のシステム

ふたつのデータを対になるやりとりの観点から分析する。Levinson(1983)によれば、adjacency pairs と呼ばれるものの例として次のようなものがあがっている。訳語をそえ、以後の分析で使う略語形をカッコの中に示す。

a. Assessment(Ass)主張 — Agreement(Agr)賛成 or Disagreement(Disagr)不賛成

b. Blame(B)非難 — Admission(Adm)容認 or Denial(Den)否認

c. Question(Q)質問 — Answer(A)答え

{Expected Answer(Ex.A)予想された答え or Unexpected Answer(Unex.A)思いがけない答え or Non-Answer(Non.A)答えなし}

d. Request(Req)要請 or Invitation(Inv)招待 or Offer(Off)申し出

— Acceptance(Accp)受諾 or Refusal(Ref)拒絶

e. Summons(S)召喚 — Answer(A)答え

母親の発話の一つの特色に「テスト質問」の使用があげられる。質問はふつう質問者がその質問の答えを知らず、それを知りたいときにするものである。これは Grice の会話の公理の一つである質の公理(真実を述べよ)とも関係している。しかし、母親はしばしば自分が答えを知っているにもかかわらず、そのことについての質問をこどもにすることがある。母親はこどもの知識を試そうとしているわけで、このような質問はテスト質問(Test Question(T. Q))と呼ばれる。以下の分析ではテスト質問を他の一般的な質問とは区別して扱うことがある。

また、会話は修正(repair)のシステムという観点からも分析される。修正には自己によるものと、他人によるものがあり、問い直されたりして他人に修正を

促されることがある。

a. Other Initiation of Self-repair(O. I) 修正の促し

b. Other Repair(O. R) (他人による) 修正

c. Self-repair(S. R) 自己修正

ふたつのデータにあらわれたすべての文についてその機能を分析分類したところ、主張、質問、要請に関連する対をみつけることができた。非難と召喚も1例ずつあったが、対はなしていなかった。対をなすやりとりを詳細に検討すると、ひとつの対になるやりとりがある場合、それに修正のシステムが加わったひとつながりの文連続(連鎖)ができていることが多いことがわかった。

テスト質問も含めた質問の対についてみると、最も基本的で単純な連鎖は、

1.1 Q(質問) - Ex. A(予想された答え)

である。ここで、ハイフン(-)は話し手がかわったことをしめす。同じ話し手が続けていくつかの文を話した場合は、コンマ(,)でくぎる。この連鎖はさらに次のように展開される。

1.2 Q-Ex. A, S. R(自己修正)

1.3 Q-Ex. A-Accp(受諾)

1.4 Q-Ex. A-Accp, O. R(他人による修正)

質問に対して思いがけない答えがされた場合、修正の促しや修正がはいるためにもっと複雑な連鎖となる。(1.1 から2.9 の具体例を表1に示す。)

2.1 Q-Unex. A(思いがけない答え)

2.2 Q-Unex. A, Ex. A = S. R(自己修正)

2.3 Q-Unex. A-Accp

2.4 Q-Unex. A-O. I(修正の促し)

2.5 Q-Unex. A-O. I, Accp

2.6 Q-Unex. A-O. I, O. R

2.7 Q-Unex. A-O. I-Ex. A = S. R-Accp

2.8 Q-Unex. A-O. I-Unex. A = S. R-Accp

2.9 Q-Unex. A-O. R-S. R-Accp

以上の連鎖をまとめて質問-答えの対の定式化をすると、次のようになる。

Q-A Format1: Q-Ex. A, S. R-Accp, O. R

Q-A Format2: Q-[Unex. A, S. R-O. I, O. R]ⁿ, Accp

ここで、質問と最初の答えの部分を除いてはすべてオプションであり、あらわれないことがある。また、[]ⁿは指示された部分が繰り返される可能性があることを示している。

これら二つのタイプに共通の基本的な連鎖は

Q-A-Accp

であり、受諾が連鎖の最後にくる。そして、答えが満足のものでない場合に様々な形で修正が加えられていくのである。したがって、それを加えると

Q-A-Accp

↓ ↑

Repair

が質問に始まる連鎖のパターンということになる。受諾は必ずしも必要ではないが、連鎖の完了を示し、効果的な会話のやりとりという意味では重要な役割を果たしている。受諾の文が実際にあらわれなくても、修正の促しや修正が続かない限り、受諾ととられるのが普通である。

鈴木(1981)も疑問詞質問文の分析に際し、上と同様の質問-了解過程をみいだしている。鈴木によれば、質問に始まる連鎖は、Ninio and Bruner(1978)のいう対話サイクル(dialogue cycle)の特徴をそなえている。彼らは名付けの際の母子のやりとりが明確な始まりとおわりをもち、やりとりの順序が一定であることを発見し、それを対話サイクルと呼んだ。

この質問の連鎖で、答えから修正への分岐がおこるかどうかは答えの性質によっている。つまり、最初の答えがどのようなものであるかが連鎖の長さ、複雑さに影響するのである。予想された答えの連鎖は比較的単純なのに対し、思いがけない答えの連鎖では修正が多用され、より複雑多様となっている。これは Levinson (1983) のいう preferred と dispreferred の区別であり、dispreferred second の有標性をあらわしている。

その他の連鎖についても定式化を行ってみよう。まず、要請の連鎖として次のものがあらわれた。

Request/Invitation/Offer-Accp

Req/Inv/Off-Refusal

Req/Inv/Off-Refusal-O.I, Accp

この他の可能性も考慮に入れると、要請と拒絶の連鎖は次のように定式化される。

Req-Ref Format: Req/Inv/Off-[Refusal-O. I]ⁿ, Accp

主張の連鎖としては次のものがあらわれた。

Ass-Agr

Ass1-Disagr1= Ass2 -Disagr2

Ass1-Disagr1, Ass2-Disagr2

Ass-O. I, Disagr

Ass-Disagr-O. I, Accp

同様に、主張と不賛成の連鎖は次のように定式化される。

Ass-Disagr Format: [Ass-O. I, Disagr]ⁿ, Accp

主張に不賛成の場合は、直ちに反対の主張が表明され、それがあらたな不賛成をひきだすということになる。

要請および主張に関連する連鎖においても、質問の連鎖と同様に、最初の話し手に対する次の話し手の対応が重要なポイントとなっていることがわかる。

4. 母子のことばの違い

上の分析では、母と子のことばはいっしょに扱われていた。ここで両者の違いに注目したい。

まず、先の質問と答えの連鎖(1.1-2.9)のそれぞれの数をデータごとに調べた。その際、母親から連鎖が始まる場合とこどもから始まる場合に分け、またテスト質問とふつうの質問に分けた。表2にその結果を示す。

ふたつのデータの違いは一目瞭然である。データ1では母親の方がこどもより多く質問をし、データ2ではその反対にこどもの方がたくさん質問をしている。質問の連鎖を始めるということは、その間会話の主導権をにぎっているということだとも考えられる。鈴木によれば、「母親の質問文の頻度が高いのはこどもが自分から質問をするようになるまでで、それ以降は平叙文を多く使うようになる」という研究があるそうである。ふたつのデータの違いはこのような発達段階の違いなのであろうか。

データ1で母親の発する質問の多くは、答えを知っているものであるからテスト質問である。一方、データ2でこどもの発する質問の多くは物や動物や人間の名前である。テスト質問の定義を考えるとこれらをテスト質問とは呼びにくい。つまり、質問者は答える人間の知識をテストする意図をもっていなければならないからだ。データ2のこどもは、本の内容を早く知りたくて催促するように「何ねー」を連発したようだ。表1の1.2の例はそれである。こどもが森の中を走っているリスの絵を見て、木を指して「何ねー」といった。母親はその質問に答えてから、さらにそのページの状況を説明してやっている。「何ねー」が「読んで」「それでどうしたの」にあたるものとすれば、これは質問というより要請である。表1の2.1の最初の例で、こどもが別の本をとりあげて「何ねー」といい、母が「これ読むの?」と答えたところなどはまさにこの要請という機能が理解されていたことを示している。この段階ではこどもは本読みを促す適当な言葉をもっておらず、かわりに「何ねー」という質問の形を使ったのだと思われる。これからこどもが適当なことばを学んで行けば、「何ねー」のこのような使い方はおそらくなっていくであろう。

また、このこどもは時に、知っているはずの名前をきくことがある。絵本の裏表紙のおなじみの漫画のキャラクターたちを指して20回も「何ねー」を連発している。この子は一種のゲームをやっていたのだと思う。答えを母親から聞き、自分の知識とてらしあわせて納得する、そんな感じだろうか。一般に、こどもは「何」「なぜ」を使って、名前や説明を求める時期があるといわれる。こどもの発した質問はほんとうの好奇心からきいたものもあるだろうし、ただ面白がってきたということもあるだろうが、こういう質問のやりとりがこどもへの有効な言語インプットとなり、言語発達に寄与していることはまちがいないと思われる。

母親がテスト質問をする場合、それが意識的であろうとなかろうと、一種の言語訓練としてなされていると考えられる。だからこそ、期待する答えが出てこない、修正のシステムを使ってこどもから答えを求めようとする。あるいは不完全な答えを補強してあるいは解釈して言い直してやったりする。その結果、表1の2.4-2.9のような連鎖があらわれてくる。しかし、どちらのこどもも母親のことばに促されて言い直すような場合をのぞいては修正のシステムを

ほとんど使わない。表3はそれぞれの発言ごとにどのような機能の文を発しているかを母子別にまとめている。これを見ると、データ1の母親は修正を促す言葉をよく使い、その結果こどもが自己修正している。どちらのこどもも修正を促すようなことばは使っていない。こどもの参加していたのは質問の連鎖の中でも質問と答えの部分がほとんどということがわかる。他人のいったことについて判断し、修正を加えると言うのは、二歳という発達段階においてはまだ未習得のスキルなのであろう。

また、ここでつけくわえておくべきことは、こどもの自己修正の中身をみると、必ずしも母親の修正が功を奏したとは限らないということである。母親がこどもからものの名前をひきだそうとしているときは、表1の2.7の例のように正しい答えがでてきたり、2.9のように母親のいうことを繰り返したりすることもあるが、2.8のように文法的な面についての修正はうまくいかない。これはこどもが各発達段階で子供なりの文法をもち、それにもとづいて話していることのあらわれであると考えることができる。

なお、最初の発話の中での自己修正は、次の発話の始まる前であり、相手の答えによる影響を直接はうけないので、ここでの集計からは除いた。実際には母子ともに見られたが、母親の自己修正は言い替えであるのに対し、こどもの自己修正のほとんどが繰り返してあった。

6. まとめ

読み聞かせ場面での日本人母子の会話分析の結果は次のとおりである。まず、対になったやりとりを核にして、それに修正のシステムが加わった連鎖のパターンがあり、その複雑さは最初の応答の性質によって決まることが多いということがこのデータでも認められた。また、母子の違いをみると、データ1では、母親は修正のシステムを使って何とかこどもから答えをひきだそうとしている。データ2では、子どもの方から質問を連発し、言語ゲームを楽しんでいるような様子であった。また、いくつかの質問は本読みを促す手段としても使われていた。

データ2のこどもの長期にわたる言語発達の記録を同様の観点から分析し、本稿の結果とあわせ考察を進めていくことを今後の課題としたい。

(1989.11.7)

参考文献

Levinson, S. C. (1983) *Pragmatics* Cambridge: Cambridge University Press

Ninio, A. and J. Bruner (1978) 'The Achievement and antecedents of
labelling' *Journal of Child Language* 5, pp1-15

鈴木敏昭 (1981) 「一語文期における言語機能の発達——疑問詞質問文に幼
児はどう答えるか——」堀素子・F. C. パン編『言語習得の諸相』
所収 文化評論出版

表1 質問の連鎖の例

{ } は状況説明である。

1.1 Q-Ex. A

データ2 子： おー、何ねー。
母： これは木。

1.2 Q-Ex. A, S, R

データ2 子： あ、何ねー。
母： これは木だよ。木。木の枝。
森の端まで走っていっちゃったよ。

1.3 Q-Ex. A-Accp

データ1 母： これ なーに？
子： でんわー。
母： 電話ね。

1.4 Q-Ex. A-Accp, O, R

データ1 母： これ なーに？
子： MOON.
母： MOON ね。これ お月さんの MOON ね。

2.1 Q-Unex. A

- ① データ2 子： {他の本をとりあげて} 何ねー。
母： これ 読むの？ 尚子。
② データ2 母： みんなで相談してるよ。どうしたかな？
子： あ！ あ！ あ！ あ！ なーに。何ねー。

2.2 Q-Unex. A, Ex. A = S, R

データ2 子： 何ねー。
母： これ 何だっけ。 これ 熊さんだねー。

2.3 Q-Unex. A-Accp

データ1 母： 暖炉 どれ？
子： 電気。 {子は別のことをいう。}
母： あ、電気がついてるね。{母はうけいれる}

2.4 Q-Unex. A-O, I

データ 1 母： どこに MOON がいるの？
子： おっき。 {「起きてる」の意味}
母： だれがおっきしてんの？

2.5 Q-Unex. A-O. I, Accp

データ 1 母： 煙突 どれー？
子： つた一つ。
母： ふた一つ？ふたつ。 A DOOR に窓がふたつあるね。

2.6 Q-Unex. A-O. I, O. R

データ 1 母： これ なーに？
子： ちょうちょ。
母： ちょうちょ？ん、ねずみさんね。

2.7 Q-Unex. A-O. I-Ex. A = S. R-Accp

データ 1 母： これ なーに？
子： でんわー。
母： これ 電話じゃないよ。ほら。
子： とけいー。
母： 時計ね。

2.8 Q-Unex. A-O. I-Unex. A = S. R-Accp

データ 1 母： まだ ある？
子： まだ ない。
母： まだ ない？ もう ない？
子： まだ。 {母は「もうない」といってほしか
母： まだね。 はい。 ったが、あきらめた}

2.9 Q-Unex. A-O. R-S. R-Accp

データ 2 母： これ 何かなー？
子： 何ねー。
母： これはね イタチ。
子： いーたーち。
母： イタチ。

表2 質問の連鎖の分類

連鎖がどちらから始まるか Question / Test Question	データ 1				データ 2			
	母		子		母		子	
	Q	T.Q	Q	T.Q	Q	T.Q	Q	T.Q
1.1 Q-Ex. A	2	3	1	0	1	0	23	0
1.2 Q-Ex. A, S. R	0	0	0	0	0	0	1	0
1.3 Q-Ex. A-Accp	0	15	0	0	0	1	1	0
1.4 Q-Ex. A								
-Accp, O. R	1	0	0	0	0	0	0	0
2.1 Q-Unex. A	1	3	1	0	1	1	3	0
2.2 Q-Unex. A,								
Ex. A = S. R	0	0	0	0	0	0	4	0
2.3 Q-Unex. A								
-Accp	0	1	0	0	0	0	0	0
2.4 Q-Unex. A								
-O. I	0	2	0	0	0	0	0	0
2.5 Q-Unex. A								
-O. I, Accp	0	2	0	0	0	0	0	0
2.6 Q-Unex. A								
-O. I, O. R	0	2	0	0	0	0	0	0
2.7 Q-Unex. A-O. I								
-Ex. A = S. R-Accp	0	5	0	0	0	0	0	0
2.8 Q-Unex. A-O. I								
-Unex. A = S. R-Accp	0	1	0	0	0	0	0	0
2.9 Q-Unex. A-O. R								
-S. R-Accp	0	0	0	0	0	1	0	0
合計	4	34	2	0	2	3	32	0

表3 質問の連鎖における発話の機能と位置

		発言 1	発言 2	発言 3	発言 4	発言 5
データ 1	母	Q 4 T. Q 34	Ex. A 1 Unex. A 1	Accp 19 O. I 12 O. R 2		Accp 6
	子	Q 2	Ex. A 21 Unex. A 17	Accp 1	S. R 6	
データ 2	母	Q 2 T. Q 3	Ex. A 25 Unex. A 7	Accp 1 O. R 1 S. R 1		Accp 1
	子	Q 32	Ex. A 2 Unex. A 2	Accp 1	S. R 1	